

子どもの「手の働き」に関する研究（第1報）

「手の働き」と人間形成

福山市立女短大 加納三千子 山本百合子 金田すみれ ○西川龍也 正保正恵

【目的】 本研究では、「手の働き」が、人間形成に必要不可欠であることをあきらかにする。同時に、今日、失われつつある「手の働き」を生活の場に位置付けしなおすために、家政教育の果たす役割を提言したい。

本報では、「手の働き」と人間形成とのかかわりを、歴史的視点等から検討を行う。この視点に照らして、以下、実証的研究による報告を行う。

【方法】 モリス、ラスキン、デューイら先人達の著書を参考にしながら論じる。

【結果】 「手の働き」は、人間の知覚及び知能の発達において、必要不可欠である。人類は「手の働き」を生活の場での様々な労働や遊びで経験し、その資産を次代に継承していった。しかし、18世紀末英国に発する産業革命は、生産労働と家事労働とを分離させ、生産の場から手仕事＝「手の働き」を追放していった。こうした状況のもとです人間疎外に対し、エンゲルス、モリス、ラスキンら先人達が厳しく警告を行ったにも関わらず、今世紀を通じて産業の機械化は進行進行し続けた。

更に、1920年代の米国を端緒として、大量生産による消費財の流入と家事労働の機械化の進行により、家庭からも手仕事＝「手の働き」は徐々に追放されつつある。わが国では高度経済成長期以降、こうした状況が顕著となっている。結果として、「手の働き」が失われることによる「人間性の危機」は、生産と消費を包括した生活全般に及ぼうとしている。